

危機の時代の芸術政策

日本、ソ連、アメリカ

開会挨拶 — 柴田英昭(愛知県公立大学法人 理事)

13:05 〈報告1〉若松伸哉
「社会に対して文学はどう向き合ったか—
戦時体制のなかでの菊池寛」

13:25 〈報告2〉安原雅之
「ロシア・アヴァンギャルド音楽研究をめぐって:
冷戦時代からソ連崩壊までを中心に」

13:45 休憩10分

13:55 〈報告3〉アン・サーシー
「冷戦中のアメリカの文化政策」

14:35 休憩10分

14:45 パネルディスカッション 質問者:七條めぐみ

15:35 質疑応答

閉会挨拶 — 川畑博昭(愛知県立大学学長)

講師:アン・サーシー氏(ワシントン大学音楽学部准教授)

安原 雅之(愛知県立芸術大学音楽学部 教授)

若松 伸哉(愛知県立大学日本文学化学部 教授)

質問者:七條めぐみ(愛知県立芸術大学音楽学部 准教授)

司会・コーディネーター:斎藤慶子(愛知県立大学 准教授)

使用言語:日本語(英語の逐次通訳あり)

開催方法:対面・オンライン(Zoomウェビナー)の
ハイブリッド開催

報告①

若松伸哉



社会に対して文学は
どう向き合ったか—
戦時体制のなかでの菊池寛

日本の大正期から昭和期にかけて活躍した小説家・菊池寛は、大衆通俗小説の分野で成功をおさめ、出版社を営む実業家としても成功するなど、その活動の多くは、常に〈大衆〉という存在が強く意識されている。日本が戦時体制へと移行していった昭和初期、1937年にはじまる日中戦争では菊池は〈ペン部隊〉を組織するなど、文学者による戦争協力を主導する立場となっていく。本報告ではこうした事態について彼の営為から考えてみたい。

報告②

安原雅之



ロシア・アヴァンギャルド
音楽研究をめぐって:
冷戦時代からソ連崩壊までを中心に

“ロシア・アヴァンギャルド音楽”は、革命の勃発と同時に一世を風靡したが、1920年代の激動の時期を経て、1930年代には忘れられた存在となっていた。しかし冷戦時代には、西側諸国において、大きな注目を集めるようになった。本報告では、1983年の〈ベルリン芸術週間〉におけるコンサートを象徴的な例として取り上げ、ソ連崩壊に至るまでのロシア・アヴァンギャルド音楽の歴史的意義の変遷をたどる。

報告③

アン・サーシー



冷戦中のアメリカの文化政策

冷戦中のアメリカ合衆国国務省は、外交目的遂行のために、歌手やバレエ団、ジャズ・アンサンブル、吹奏楽団ほかアーティストをワールドツアーに起用した。本報告では、1950年代と1960年代に注目して、これらの文化外交プログラムを検討する。ダニエル・フォスラー＝ルシエやキャロル・オージャ、そのほか冷戦中のバレエ公演についての報告者自身の研究をもとに、アメリカ合衆国国務省が文化外交を利用することによって何を達成しようとしていたのかをあきらかにし、またこれらのプログラムが成功したのか否かについて評価する方法を提案する。

2026年6月28日(日) 13:00~16:00

愛知県立大学長久手キャンパス
K棟多目的ホール/オンライン

参加費無料

※未就学児の入場はご遠慮ください。

〔交通アクセス〕東部丘陵線(リニモ):「愛・地球博記念公園」駅下車徒歩5分

状況により、延期・中止またはオンライン開催に変更することがあります。詳細はWEBサイトにてご確認ください。

●募集人数:会場120名/オンライン200名
[申し込み期間:5月26日~6月25日]

【要事前申込】

愛知県立大学地域連携センターWEBサイトにアクセスいただき、
特設ページよりお申込みください。

